

文献紹介

山田安彦編：『方位読み解き事典』

柏書房 2001年6月

四六版 本文417頁 3,200円本体

身近な日常生活において人々は方位を認識したり、方位に関心を持ったりすることがある。歴史地理学者である編者の山田安彦氏は地理学の立場から方位を考察され、これまでに単著『古代の方位信仰と地域計画』（古今書院、1986年）と編著『方位と風土』（古今書院、1994年）の二著を上梓されている。そこで注目すべきことは方位と地理学との関係である。一体この両者はどんな関係があるのだろうか。氏はそのことを研究課題とされてきた。いわば本書は氏が常日頃抱かれている方位と地理学のイメージの一環をなすもので、その研究の成果ともいえるものである。

書名は事典と名付けられているが、内容は用語や事項の辞典にみられるような形式のものではなく、序のほか41編の論文と5編のコラムからなっている。

通常、方位観は地域によってあるいは民族によって様々に促えられているので、論文の内容も地理学以外に考古学・民族学・民俗学・科学史等々隣接科学の分野つまり学際的な分野の結集ともいうべきものである。それだけに執筆陣も延51名という多くを数え、何れもその顔觸れは夫々の分野の第一人者という方達ばかりである。

本書の本体は序と6部と索引からなり、夫々の部には4～13編の論文が収められ、また部によっては別に幾つかのコラムが載っているものもある。以下、序および各部ごとに構成をみる。
(氏名は執筆者、敬称略)

| | | |
|-----|---------------|-------|
| 序 | 方位という視点でものをみる | |
| | 方位とは | 山田 安彦 |
| 第1部 | 地理と方位 | |
| | 日本の地名 | 中島 義一 |
| | 近世日本の地図 | 川村 博忠 |
| | 地籍図 | 磯永 和貴 |
| | 測量 | 赤桐 毅一 |
| 第2部 | 信仰と方位 | |
| | 神道 | 細矢 藤策 |

| | |
|-----|-------|
| 仏教 | 菅野 成寛 |
| 修験道 | 長野 覺 |
| 風水 | 澁谷 鎮明 |

第3部 生活と方位

| | |
|----|-------|
| 農業 | 元木 靖 |
| 民俗 | 岩坂 七雄 |
| 恵方 | 和田 光生 |
| 民家 | 早瀬 哲恒 |

第4部 考古・歴史と方位

| | |
|--------|-------|
| 弥生の建造物 | 佐伯 英樹 |
| 古墳 | 佐伯 英樹 |
| 古道 | 木下 良 |
| 日本古典文学 | 黒木 祥子 |
| 都城 | 山田 浩久 |
| 鎌倉 | 河野眞知郎 |
| 江戸 | 磯永 和貴 |
| 城下町 | 山田 浩久 |
| 近代都市 | 山田 浩久 |
| 沖縄 | 澁谷 鎮明 |
| アイヌ | 遠藤 匡俊 |

第5部 世界各地の方位

| | |
|------------|-------|
| 中国古典文学 | 一海 知義 |
| 朝鮮 | 澁谷 鎮明 |
| インド | 小林 圓照 |
| 方位の神話学 | 植村 亘 |
| イスラエル | 池田 潤 |
| オリエント・ギリシア | 高橋 正 |
| エトルリア・ローマ | 平田 隆一 |
| 英語圏 | 中村 雅子 |
| 北アメリカ | 久武 哲也 |
| メソアメリカ | 村上 忠喜 |

| | |
|----|----|
| 敦賀 | 公子 |
| 伊藤 | 伸幸 |
| 柴田 | 潮音 |
| 中森 | 祥 |
| 馬瀬 | 智光 |
| 原 | 毅彦 |
| 寺嶋 | 秀明 |

第6部 科学と方位

| | |
|-----|------|
| 科学史 | 小川 劦 |
| 気候 | 設楽 寛 |

| | |
|-----|-------|
| 風名 | 設楽 寛 |
| 生物 | 橘 正道 |
| 心理学 | 東山 篤規 |

上記のほか、5編のコラムは次のごとくである。

| | |
|----------|-------|
| 社寺建築の方位 | 関口 靖之 |
| 山で呼ぶヤッホー | 長野 覺 |
| 葬送空間と方位 | 浅香 勝輔 |
| 便所の位置 | 磯永 和貴 |
| モンゴルのゲル | 古谷 尊彦 |

序を読んでみると、書名の“読み解き”という意味が分るし、また編者が抱く方位観を理解することができる。いわば序は本書を繙く際の手引ともなるものである。

第1部は地名・地図類(含絵図・測量)を中心に地理学側から方位・方角を仔細に検討している。

第2部は宗教や風水などで問題とされる日神信仰・十方世界・十界思想・八卦方位などを取り上げて方位の基本的関係の考察をしている。

第3部は農作業を規定する方位の在り方や土地・家屋など住生活で注目される恵方・鬼門などを取り上げてそれらと方位との関係を論じている。

第4部ではわが国の古墳築造や古代道の敷設、さらに歴史的、近代的な都市の立地・建設に方位がどのように考えられ、扱われているのかを考察している。

第5部は国々によって宗教・民俗・言語・文化などが違う。したがって方位観も異なる。具体的に国を取り上げて考究している。

第6部は天空・気候そのほか主として自然科学の分野では方位・方角がどのように扱われているかについて個々の分野ごとに述べている。

なお、コラムでは1~6部の各部で述べられていないが、日常生活の面で方位・方角に関して古来よりの言い伝えや慣行などの事柄を取り上げ、各部の論文の補完の役割をしている。

以上、本書の内容を概括的に紹介してみた。地理学が対象とする空間に人々は方位・方角を認識するのである。しかし、最近ではその認識も薄らいできたと編者は「はしがき」で述べている。そのようなとき本書の刊行によってその認識が地理

学的視野のもとに改めて高まることを期待するとともに類書がない本書だけに是非一読をお勧めしたい。

(山寄謹哉)

有薗正一郎・遠藤匡俊・小野寺淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編：『歴史地理調査ハンドブック』

古今書院 2001年5月

A5版 249頁 本体2,800円

概説、原論、研究法という三者の教授内容を示したテキストと用語辞典の存在は、人文・社会科学の極度に細分化された各研究分野にとって、高等教育・社会教育の課程においても広く一般に認知されるために必要な基礎的条件の一つと思われる。本書の出版は、歴史地理学を志す者だけでなく、指導者にとっても意義深いものがある。

歴史地理学の分野においても、概説は1950年代から、原論については1970年代から、用語辞典は1980年代以降、長期にわたって読み継がれている書物が相次いで出版されてきた。数多のロングセラーのなかには、菊地利夫『歴史地理学方法論』大明堂、1977・1987のように、国外にも広く紹介されて日本の研究・教育水準を世界に問うこととなった他に類書をみない歴史地理学原論のテキストもあらわれた。本書は、この大著が世に出た段階では出揃っていなかった調査研究法の動向を執筆陣の歴史地理学観に応じて再構成したハンドブックと位置づけられよう。

「はしがき」には、「…本書は単なる調査の手引書ではないし、いわんや概説書でもなければ、入門書でもない。本書は、芽吹いた歴史地理学の新芽を開花させなければならないと考える研究者が寄り集まって、その新たな方法論と研究手法を共有の財産とし、これを世に問うためのものである。」と出版意図が高らかにうたわれている。本書にかけた編集委員の意気込みがうかがえる。

編集委員を除く執筆者は、青山宏夫、阿由葉司、五十嵐勉、出田和久、伊藤寿和、岩崎公弥、岩鼻通明、上原秀明、宇野隆夫、岡本耕平、木本雅康、小島道裕、後藤雄二、貞方昇、杉浦芳夫、田中智彦、額田雅祐、野間晴雄、平井松午、藤田裕嗣、松尾容孝、森勝彦の22名にのぼる。第一線で活躍中の中堅研究者を総浚えした執筆陣といっ